

スウェーデン王国・デンマーク王国の性情報 および性教育事情覚書（その4）

ー スウェーデン王国の性教育史に関する邦文研究情報集成 ー

佐藤年明*

ビヤネール多美子やレオン・パウチャーの著作その他に依拠して、邦文での先行研究によって知りうる範囲のスウェーデン性教育史に関する情報を整理した。

キーワード：性教育、スウェーデン（Sverige）、学習指導要領

て、以下のように報じている。

はじめに

本稿は、北欧2国の性情報・性教育に関する連続報告の第4報であり、Sverige（スウェーデンの原語表記）の性教育史に関する先行研究検討の初歩的段階として、日本語文献による情報を収集し整理したものである。

1. スウェーデンの性教育の後退？

Sverigeの性教育について日本で得られる情報はきわめて少ない。筆者が渉猟した範囲では、最近20年間のSverigeの性教育に関する邦文の情報は今のところ以下に紹介する1編のみである。著者であるビヤネール多美子はStockholm在住のジャーナリストである。

筆者自身、1997年の初めてのSverigeへの渡航に先立って、中部日本スウェーデン協会副会長の松本幸雄氏の御紹介によりビヤネール氏と連絡を取り、Stockholmにある性教育研究機関を2つ紹介していただいた。第2報⁽¹⁾で報告しているインタビュー記録はその成果である。

ビヤネールは、日本の性教育研究団体である“人間と性”教育研究協議会の機関誌上で、最近におけるスウェーデンの性教育の後退につい

ビヤネール多美子「新指導要領によって性教育は後退か!？」（『ヒューマン・セクシュアリティ』No.16 東山書房 1994年 P.114）

（前略）

あるセミナーで、スウェーデン性教育協会（RFSU）クリニックで働く助産婦のクリスティーナ・ロガーラさんにあった。その時、彼女はわたしに「日本は性教育が学校の正課になったと聞いたけど、スウェーデンは逆に後退よ」と、憤慨して言った。

もっと話を聞きたいと、わたしはRFSUの新しい移転先にロガーラさんを訪ねた。

（中略）

◎今後は生物科に偏ってしまう可能性が…

（中略）

ー性教育について話してほしい。

「今年（1994年）7月から実施の新指導要領は“性と共生”授業については非常に不明瞭で、性については生物科だけでしたか取り上げていない。倫理と共生についても、前提として他の科目でもやるべきと書いてあるだけだ」

ーそれでは、どのようにしてほしいのか。

「われわれの目標は、セクシュアリティ

* 三重大大学教育学部教育学教室

を独立した科目にしてもらいたい。小学校から高校までの間には、心身にいろいろなことが起きる。生徒によっても発育度が全然違う。その年代に適した授業が必要だ。今までの指導要領ではいろいろな科目で取り上げるようにと指導してあったから、教師にはやり易かった。今後は生物科に偏る可能性がある」

◎指導要領の変更を求める動きの中で

ーしかし、スウェーデンではRFSUをはじめ、いろいろな団体が協力して社会での性教育を行なっている。協力体制という点で、他の国よりすごいと思うが……。

「今回も指導要領を変えてもらうために、RFSU、国民健康研究所、RFSL（ホモセクシュアルの会）、エイズクリニックなどが一緒になって、行政側に会いに行き、変更を納得させたはずだった。ところが、結果は違っていた。今後私たちにできることは、どの学校が、“性と共生”の授業をしていないとか、時間数が減ったとか、学校を監督していくことだ。その心配が不必要になることを望むが、もし悪化するようなことがあれば、政治家にロビイストとして働きかけるとか、アクションを起こさなければならない。新指導要領で一つ期待できる点は、校長の権限が強いので、校長をまず揺り動かすことだが」

スウェーデンの性教育は他の国に先駆け、先進的な役割を果たしてきた。良い指導要領があったから、とロガーさんは言う。しかし、今回の指導要領では性教育に限らず、全般的に大まかなラインを決めるにとどめ、実施は各学校に任せるとしている。成熟したやり方といえばそうだが、これでは、よくやる学校とやらない学校の差がついてしまう。RFSUの出番はますます必要のようだ。

（次に紹介する文献では「学習指導要領」についての情報を整理しておく。ここで依拠するのは、Sverigeに長く滞在するイギリス人研究者レオン・パウチャーの1982年の著書（邦訳は1985年）『スウェーデンの教育 伝統と変革』である。従って、当然ながら1980年代中盤以降についてはフォローできない。

同書の「義務教育学校」の項の中から学習指導要領に関する記述を抜粋してみる。

「総合制の基礎学校（グルンドスクーラ）の目的は、1962年の学校教育法の第1条で明解に述べられている。（中略）法律上のこれらの諸目的は、1960年代初頭に指示されて以来改変されておらず、7～10歳の低学年（ローグスタディエト）、10～13歳の中学年（メランスタディエト）、13～16歳の高学年（ヘーグスタディエト）という3段階の基本的組織構造も不変のままである。しかしながら、カリキュラムは、正規の学習指導要領（レーロプラン）における一般指導指針や課業活動方法とともに、常に改革され続けてきた。新しい総合制学校の嚆矢となった1962年度学習指導要領（Lgr 62）の原案は、1967年の学習指導要領の改訂（レーロプランスウーベルシン）の提案へと導くものとなったが、それ自体が1965年に始まる『絶えざる改革』を課題としていた。新しい公式カリキュラムは、1969年度学習指導要領（Lgr 69）の中で20巻の指針集とともに公表され、1978年には、さらに70年代に対する論評が学校教育庁から提言として公表された。そして、（中略）1980年度学習指導要領（Lgr 80）という、公式には1982年8月に導入された現在のカリキュラムが誕生した。」⁽³⁾

ここから、学習指導要領は1962年・1969年・1980年に改訂されていることがわかる。

学習指導要領という文書の性格については、同書に次のように記載されている。

「公式教育課程は2篇からなる。第1篇は一般編であり、これには法的拘束力があり目標と指導方針（モール・オク・リクトリンエル）、教授細目（クールスプランネル）および各教科に応じた時間配分のなされた時間割（タイムプラ

2. Sverigeの学習指導要領について

ビヤネールは1で紹介したように、1994年の指導要領の改訂に言及している。指導要領

ンネル）について述べられている。すなわち、これは『学校と教職員のコントロール手段』である（中略）。第2篇は、定期的に告示され、教授細目の解説からなるが、これには法的拘束力はない。両篇とも1980年度法令第64号（1980年2月14日）に従って、学校教育庁によって告示されている。」⁽³⁾

Sverige の中等社会科教科書を邦訳した川上邦夫によると、1980年版学習指導要領は1994年に改訂された。したがって1で紹介した性教育の後退というコメントは、1980年版から1994年版への変化に関するものであることがわかる。しかし川上は、1990年代の改訂を以下のように積極的に評価している。

「1991年から1995年にかけて、スウェーデンでは基礎学校、高等学校、大学を包摂する一連の大規模な教育・学校制度の改革が推進されました。その基本的な狙いは、教育の方法と内容について、個々の学校により大きな決定権を与えること、および生徒・学生にたいして、学習の内容についてより大きな選択権を与えることです。一言でいって規制緩和・選択の拡大です。」⁽⁴⁾

「スウェーデンの学習指導要領は、次の三つの基本計画から成り立っています。『学習計画』（レーロプローン）は学校教育の大綱を、『教科計画』（クシュプローン）は教科の種類とその基本内容を、『時間配分計画』（ティームプローン）は教科別の基準授業時間数を定めます。この三つの基本計画を、『学習指導要領』と総称することができます。」⁽⁵⁾

「基礎学校の教育の大綱を定める『1994年基礎学校学習計画』は、第1章『学校の価値基準と任務』、第2章『目標と指針』の2部構成となっています。全文でわずか13ページほどの短いものです。この短さは、50ページほどもあった1980年学習指導要領と比較すると顕著な変化です。それだけ、内容が精選されたと言えるでしょう。」⁽⁶⁾

川上が積極的に評価する学習指導要領の簡略化、内容精選によって、一方でビヤネールが報告文の最後で言及しているように、性に関する

学習の位置付けが弱められたということなのだろうか。

なお、2つの文献において原語についてはいずれもカタカナ表記のみであり、同じ原語の読み方も不統一であるが、そのまま紹介した。

3. 1940～1970年代の Sverige の性教育

ビヤネールの著書『スウェーデンの性教育と授業革命』（昌平社 1976年）は、著者の知る限り Sverige の性教育に関する唯一の邦文著作である。この本以降の情報として筆者が把握している唯一のものが、1で紹介したビヤネールによる雑誌報告なのである。

『スウェーデンの性教育と授業革命』⁽⁷⁾ にもとづいて、1940年代から1970年代までの Sverige の性教育の状況を素描してみよう。

- 1942年、政府は性教育が義務教育のカリキュラムに含まれるべきであると勧告した。
- 1945年、最初の教師用手引き書が出され、低学年で最初の性教育が試みられた。

当時の授業は生理学に集中したもので、なぜ赤ちゃんが生まれるかなど、体の構造ばかりに集中した。

- 1956年、学校教育庁は“教師のための性教育手引き書”を出した（1945年版の改訂版）。性教育は必須となった。

必須と言っても、性教育という単科の授業があるわけではなく、低学年（1～3年）は地域社会などで、中学年（4～6年）は自然科学、高学年（7～9年）は生物、社会、宗教の各科目の中に折り込まれていた。

- 1964年、スウェーデン生徒会中央組織と青少年政党組織グループが、1956年の手引き書を非難した。理由は内容が古く、現代社会にそぐわないこと。すなわち、感情面の要素を欠き、生理学に片寄っていることである。
- 国は研究委員会を設け、10年をかけて調査を行なった。

この調査研究に加わった性教育協会会長カールグスタフ・ボエシウスはこう語る。

「調査を始めた当時は学校での性教育、青少年の性習慣などの資料が皆無と言っている

- くらいで、各方面の調査などから始めたら10年かかってしまった。107回の会議を重ね、1ページずつ調査委員全員で構成したもの」
- ・1974年、“性と人間関係”調査委員会報告書「教師用引き書のための“性と人間関係”問題に関する調査報告と提案」(816ページ)
 - ・これを土台に新しい教師用引き書が作成され、1977年春から斬新な内容で性教育授業が始まる。

このように性教育については1945年・1956年・1976(?)年に教師用引き書が作成され、1956年からは必修化されたというのだが、引き書作成の時期は2で見た学習指導要領改訂の時期(1962年・1967年・1980年)と一致しない。これは性教育が単独の教科として実施されていないことと関係しているのかもしれない。しかし、学習指導要領改訂は性教育と何らかの関係を持つはずである(1で見たように)。この点については、今後さらに探っていきたい。

4. 1977年版性教育カリキュラムの内容

引き続きビヤネールの著書によって⁽⁸⁾、同書出版時点ではまだ実施予定段階であった新しい性教育カリキュラムの概要を紹介する。筆者の知る限り、これはスウェーデンの性教育カリキュラムの系統立てた紹介としては、現在のところ日本における唯一のものである。このカリキュラムの提案後1994年の学習指導要領改訂に到るまでに、このカリキュラムがどのように実践に移されたかについては、残念ながら何の情報もない。今後さらに情報収集をすすめたい。

なお、以下にいう“性と人間関係”とは、1のビヤネール報告での“性と共生”と同じではないかと推測している。

[1956年版教師用引き書との異同]

生理学上や解剖学上の授業については従来通り変更はないが、違いは新しい授業内容がセックスそのものより、お互いの思いやり、愛情、友情、相互理解により多く重点を置いていることである。すなわち、人間関係に存在する心理上の、道徳上の、社会上の問題を、今まで扱ってきたよりも何倍も取り入れる。

この一つの理由としては、スウェーデンの性教育はこれまで感情面の重要さを強調しないで、あまりに“生理学”を中心にしたものだという非難が多かったことがあげられる。たしかにそのとおりで、性関係を共にすることによって生ずる親密な人間関係は、お互いの心をゆたかにする機会でもあるということが、今まではあまり取り上げられなかったようだ。

もう一つの理由としては、近年、社会が機構的にも観念的にも急速な変化をし、個人の上にも社会全般にも、問題や困難がふえてきている。それゆえ“性と人間関係”の授業には、次のようなことを取り入れることが提案された。

- ・相手と幸せや喜びを分かち合える源としてセックスを経験する、という意識を持たせる。また、責任感、思いやり、配慮のある関係にするための準備として解剖、生理学、心理学、道徳や社会的背景に関する知識を得させる。
- ・性生活について言われているいろいろな価値判断や考え方に対して、客観的で片寄らない指導をあたえる。基本的価値判断に対しても、学校としてはどちらのサイドにもつかないことが必要である。
- ・性が人間の生活にとって不可欠なものであり、“一緒にいる”ということは、社会機構の維持や人間の発展と、がっしり結びついているのだという理解度を上げていく。
- ・成熟度や性経験は人それぞれに違うということに自然に気づくように、意識をはぐむ機会があたえられなければならない。

以上のような新しい観点と同時に、以下の3点も教えなければならない。

- (1) 性解剖と生理学。
- (2) 性生活におけるいろいろな説明(例えば性交、自慰、性機能の障害、避妊方法、性的衝動、性病など)。
- (3) “一緒に”生活することは、感情や人間関係、価値判断、道徳標準や社会的状況に関係するということ。また、“一緒に”生活することにより生ずるいろいろな問題。

1956年版から変更されていない点は次の通りである。

- 本質的事実はすべて伝えられるべきである。
- 性問題に対して、いやに上品ぶったあいまいな行為や言葉とか、ベールをかぶせた秘密主義には反対するように努めなければならない。
- 男女いっしょに指導されなければならない。
- 性情報は就学前から始められるべきである。
- 子どもたちの問いに対して、正確な答えがなされなければならない。

一方、新しい手引き書と古い手引き書の相違点は次の通りである。

- 今までより年齢がずっと下げて教えられる。そして、おのおのの学齢段階で、より完全な情報があたえられる。この理由は、現代では以前とくらべ、性がよりオープンになってきているため、生徒の質問や考え方が広く、多くなってきているからである。性知識を持つことが、どんな年代層にも、問題だとか有害だとか考えることができなくなった。
- 性問題について、若者同士の関係が目前の心配事にならない前に、若者たちは情報を得、考察力を持つことが必要である。
- 低学年で、性交がどう行なわれるかについて、古い手引き書は、紹介をした方がいいとしているが、新しい手引き書では、されるべきだとしている。
- 以前の性教育は性生活を生殖過程のように扱っているのに対して、新しくは中学年以上の授業では、セックスのもっとも一般的な動機は家族をふやすということよりも、“一緒に”なることが楽しみ、喜びであるからという事実状況から授業を始めることにする。

このことは低学年でも伝えられるべきだが、教育学上の理由から、子どもはいかに生まれるかという問題を扱った時に伝えることが適当である。

- 授業は男女の結婚生活だけを中心とするのではなく、婚姻外関係も含む。スウェーデンで世論調査をした結果、これを不承知としたのは年齢の高い世代でただの5%、若い世代では2%だけであった。
- 非常に若い年齢層の性関係は、成長期の若者は抑制をした方がいいという一般のお説教

でなく、他の理由で反対すべきである。

- 結婚を早くすることをすすめるよりはむしろ、婚姻前関係に入ることをすすめるべきである。

[年齢別の教育内容]

◎就学前（3～6歳）

子どもが人生の最初のころに経験する愛情や安らぎは、異性との関係を含めて、将来あたたかい人間関係をはぐくむのに深い影響をおよぼす。それだからこそ、“赤ちゃんはどこから生まれるの”を就学以前に、家庭で教えることが大切だ。その年代の子どもの経験を、学校が家庭にとってかわることはできない。しかし、それを幼稚園や保育園のような就学前学校で手引きをする時には、親とよく相談して、あたたかさや親しさの雰囲気の中で、子どもの質問に正しく答えるようにしなければならない。

◎低学年（7～9歳）

低学年での性教育はふやすべきである。この主な理由は、子どもが性生活について知ることをもはや昔のように心配する必要がなくなったことと、与えられる知識をそのまま受け入れられる年頃であるからだ。

また、今日の低学年生は、あいまいな知識を持っていたり、一部には間違った考えをもっていることもあるので、直すようにしなければならない。

学期はじめの1年生の父母会では、教師は性教育が行なわれることを伝え、親の見解や情報を聞くべきである。

具体的な授業内容例は以下の通り。

- 月経—現代のこの年代の子どもの4人に1人は初潮をみて、何のことかわからず、子どもによっては死ぬのかと思ったり、はずかしくて親に言えない子もいる。それゆえ、学校としてはできるだけ早い時期に、知識を与えることが大切だ。
- 自慰行為—自慰行為は小さな子どもに一般にあることだが、自慰が危険だとか、へんなことだなどの考えから解放する。
- 避妊—ほとんどの子どもはピルやコンドームについては聞いたことがある。生徒たちのこ

これらの質問に対し教師は十分に説明ができるように用意していなければならない。

- ・不妊症・断種—子どもは一部の大人たちが自分の子どもを持っていないことを不思議に思うことがある。教師はこれに対して、大人の中には子どもがほしくないと思っている人も、ほしいと思っても体の具合が悪くて子どもがつかれない場合もある（体を治すことが不可能な場合も、治療することができる場合もある）、だから子どもがないということは決しておかしいことではない、というような説明を十分しなければならない。
- ・養子—前項に関係している場合もあるが、多くの大人たちが自分自身の子どものつくりたくないが、子どもは持ちたいと思っている。

そのため、開発途上国などの外国から養子をとることが多いことを教える。この場合、人種差別が起こらないように子どもたちを指導する必要がある。

- ・性的異常者—小さな子どもの多くが、性的異常者に会うかもしれない。そんな場合は、どんなにいいことを言われても、また、おいしい物をさし出されても、ついて行ってはならないことを教える。

低学年での授業は簡単に、わかりやすく、ほとんど話しのかたちをとる。子どもは性については町の中でみるポスターや新聞広告、大人たちの性に関しての会話など、たえず目や耳にする機会を持つのであるから、低学年での指導は、性が当惑するものであったり、秘密めいたものであったりしてはならない、子どもたちが怖いものと思わないように、安心感を持たせるような授業にすべきである。

◎中学年（10～12歳）

授業目標は次の通り。

1. 現実性にもとづいたよりよい知識。
2. 思春期が始まるときに起きる精神的、肉体的変化に対する理解を深める。
3. 生徒の将来の生活において、セックスは価値あるものであることが理解できるように啓発する。

このようにして、生徒たちにこの年代の性関

係に関する決断や、将来の心の準備ができるようにさせる。6年生になると“責任感”とともに基本的な生理学的要素も取り入れられる。そして、性交を生理学的、心理学的に、また宗教面、道德面、社会的視野から、教師が簡潔に説明する。

性交の扱いは、以下の通り。

この年代は思春期を迎えて、一部の生徒は近い将来、性交に直面する時期でもある。それゆえ、性交についてはギブアンドテークのうえで行なわれるべきであることを説明する。しかし、その際、あまり早期の性交は両者が失望する場合があることを説明すべきである。また教師は、ほとんどの親たちが生徒たちのような若い年齢で性的関係を持つことを好まないことを、彼らに話すべきである。

しかし、現実問題として、中学年の後半には初めての性的経験をする生徒もいるため、学校は特に、次にあげる重要な点を生徒に意識づけることが大切である。

- ・どんな人も他人の関心や欲求を満足させるための道具であってはならない。
- ・だれでも注意といったわりをもって接しなければならない。
- ・肉体的暴力や精神的圧迫をもって性交を得るということは間違っている。
- ・ほしくない子どもは産まない。
- ・リン病を移さない。リン病は15～19歳の年齢に多いが、性教育の普及で近年激減してきている。とはいえ、学校は性病を根絶するために、絶えず生徒に情報を情報を伝えなければならない。
- ・ホモセクシュアルに対しての偏見は、若い男子たちの間に非常に強い。学校はそれに対する寛容さと理解を養うべきである。

◎高学年（13～15歳）

“性と人間関係”の授業では、非常に広範囲の指導が望まれる。授業は何人かの複数教師で行なわれ、社会、宗教、家庭などいくつかの科目を合同で行なう“課題活動”で構成される。あるいは、それぞれの科目の中で“特別な課題活動”として扱う。この場合、道德的、心理学

的、社会的見地に特に重点が置かれなければならない。

“課題活動”とは、課題の紹介から始まるやり方である。たとえば、フィルムなどを見せ、生徒たちの関心を引き起こし、教師と生徒がいっしょになって話し合う。生徒は課題についての基本知識を受けた後、課題の中で自分の興味のある部門をグループもしくは一人一人で見守る。各部門の調査が終わると、研究発表をみんなで行なう。課題によってはいくつかのクラスがまとまる場合もあるし、1 クラスの場合もある。

- ・婚姻前の男女生活—婚姻前の性交に対してはいろいろな考え方があるが、教師は否定も肯定もせず、客観的な見方で説明する。今まで生徒たちが疑問に思っていたことをここで話し合える機会をつくるべきである。
- ・ポルノグラフィ—学校はポルノグラフィに対しては非常に否定的に扱うべきである。ひどいポルノグラフィは子どもによくない影響を与える。ポルノグラフィに描かれる性は、いたわりや、あたたかさがまったくなく、暴力を肯定し、女性の扱い方が屈辱的であるのが普通である。教師たちは、ポルノグラフィに出てくるこのいつわりの愛を生徒たちが敵視し見抜けるように導くべきである。そして、人間の扱い方、特に女性の扱い方を授業で批判的に分析すべきである。
- ・墮胎については、学校は肯定も否定もしてはならない。
- ・売春については、まず背景から説明する。たとえば、人によっては売春以外に相手を求めることができなかつたり、結婚生活で性的に満足していないなど。しかし、教師は売春に対して、否定的な面を示すべきである。
- ・最初の性交は、神経質になっている場合が多いので、失敗に終わるといことは全く普通であることを説明すべきである。理由としてはことが最初というのは他のことと同じように、非常に肝心で、このような説明を聞かなければ、最初の傷が一生を支配することにもなりかねないからだ。よい性生活とは、二人

の深い結びつき、練習や経験からもなる。しかし、ここで重要なことは、こういうことを教えるからといって、くどいようだが学校では決して早期の性交を生徒にすすめるのではなく、むしろ反対に、早期の性交に対しては注意を与えるべきである。

◎高等学校（16～18 歳）

調査によると、今日の高校生年代の若者たちは“性と人間関係”における学校での授業を非常に必要なことだと、彼ら自身痛感している。授業方法としては自由に時間を組み、全クラスまたは小グループで行なう。全クラスの場合は教師たち、校医など学校の他のスタッフ、学校以外の各分野の専門家と生徒たち自身の共同研究のもとに、たとえば講義やパネルディスカッションを組む。価値判断については基礎学校での根本的な考え方（前述）が適用されるが、高校生時代では特に生徒自身の批判的見解を取り入れるように強く強調されなければならない。そして、授業は新鮮な知識を持ってなされなければいけないし、道徳的、心理学的、社会的な見地からみたコミュニティ全体の中での生徒人間関係について、広範にわたる論争のあることが説明されるべきである。

以上の全学年を通じてもっとも大切とされるのは、計画段階で生徒の参加をみることである。
[“性と人間関係”授業の基本ライン]

性については人それぞれ価値判断が違うため、教師用引き書き作成にあたって各方面に異論があったようである。公共の教育機関である学校が特定の人たちやグループの意見に片寄ったものにならないよう、委員会では“性と人間関係”の授業の基本ラインを次のようにまとめている。

◎授業に際しての留意点

- ・価値のある目的に達するためには、セックスはお互いの協和と相手への思いやりが混ざり合ったものであるべきで、性関係を持つことは、他のことと全く同じように、他人への配慮や結果に対する責任感が伴わなければならない。相手の意志を無視して精神的な圧迫や肉体的暴力を加えてはならないのは、性に限ったことではない。

- ・伝統的なダブルモラル、たとえば男は許されても女は非難されるというような慣習的偏見は是正すべきである。
- ・性に関しての人種差別問題も取り上げられるべきである。移民が続いている今日、これはホットな話題である。
- ・セックスのかたちが人によって違い（たとえばホモセクシュアルなど）、それに対して偏見や非難があるが、そのような現象に対しては思いやりのある態度をはぐくむ。
- ・心身障害者や刑務所収容者等のセックスの権利を向上すべきであるという態度で、授業はすすめられるべきである。また、高齢者の性生活に対する偏見もなくすべきだ。
- ・堕胎に関しては、あるグループは医学上その他の理由でどうしても必要な場合だけに限定すべきだと言い、他の人たちはその女性が望むならいいではないかという意見を持つ。学校としてはどちらの見解にも傾いてはならない。両方の言い分が正しく生徒に報告されることがいちばん重要なことだ。
- ・婚姻前の性交渉は、結婚や同棲をしようとする相手ならばあたりまえであると大半のスウェーデン人は認めている。しかし一部のキリスト教徒は、性生活と結婚を結びつけている。そのような場合には、こんな見方もあるということを、適切な敬意ある方法で学校は紹介すべきであり、決して彼らの見解を否定するような授業を行なうべきではない。
- ・現代の若者の多くは、結婚という形式にとらわれずに家族をきずくことが多い。このような関係に対して、よいとか悪いとかの見解は学校は持つべきではない。生徒たちは同棲や結婚についての法的、経済的条件について十分に知識を与えられるべきである。
- ・今まで使われていた 1956 年版の教師用手引き書には、ごく若い世代の性交渉はつつしむべきであるとあった。しかし現実には、基礎学校を卒業する生徒（16 歳）の 4 分の 1 はすでに性経験をしており、10 代をぬけ切るまでには大半が経験済みである。しかし、あまりに早く性経験をすることは、多くの場合

精神的にも安定していず、責任を負うこともできないで、不幸な結果を招くことにもなる。それで学校としては、そのような関係をできるだけ減らし、これらの否定的な結果を中和させることが必要だ。

同時に、かなりティーンエージャーたちが、性関係を責任のある、配慮した態度で持っていることも確かなので、そのような若者たちが必要とする援助や忠告を学校はすべきである。もし学校が、彼らがやっていることは道徳的に非難すべきだなどと言ったら、生徒たちは何か悪いことでもやっているような気になるだろう。そのようなことをしたのではよい授業にはならない。

委員会がやった調査では、中年以上のスウェーデン人の大半は若い成長期の性交はたしなめるべきだとしているが、若い年代の親は、十代の後期の若者たちが性交を伴った特定の友達を持つことに異存はない。但し彼らの関係に責任感と配慮があるならば、としている。

学校としてはこれら若い親や若者たちを道徳的に否定することは間違っている。かといって学校が、大多数の意見だからといって、それだけで肯定してしまうことができない。また、学校がそう教えたからといって、他の人の判断を変えるようなことがあってはならない。授業の原則としては、責任と配慮を持ってすすめることなら、いろいろなタイプのふるまいが認められるとすべきである。授業においては、性交の経験を持ちたいとする意見も、“待つ”という意見も理解され、認められるべきである。

ことばをかえるならば、学校は性について道徳の味方をすべきでなく、生徒たちがはっきりと自分の道を見出すことができるように、理論面でも実際面でも偏見のない考え方で授業をすすめるべきである（こういう行き方の教育は若い世代、18～30 歳の大多数に好まれている）。道徳面を押しつけければ、生徒は自分たちのやっていることは道徳に反することだと、自分たちの殻に閉じこもり、望まれていないことを知りながら自分のやり方をお

しすすめるだろう。それよりも、道德面を弱めて、偏見のないやり方で生徒たちといっしょに、本質的な問題に真正面から取り組む態度が望ましい。

- ・しかし、あまりに若い年代の性交渉は、今述べたこととは違った面があるので、早期の性交渉を避けるように授業がなされるべきである。まず、学校で扱われる性の授業についての根本的価値を徹底的に話し合う。いちばんいいのは、生徒間の異なった考え方をさせ、よくない行動について生徒自身が意見を出せるように授業を刺激することである。それから、早期の性交渉は次のような危険をおかすことをはっきりと指摘する。

○感情面でこの年代では完全には発育していないから、相手への配慮に欠けるし、責任が持てない。

○短い、何の感情もない性交渉に入ることは、男女の性関係に対して非現実的、否定的な見方をするようになる。

○若く、経験や判断が不十分なことで、思わぬ妊娠をしたり、リン病にかかったりする。

年齢の低い生徒たちの性関係問題について学校はどんな一般的な立場もとるべきではないが、あまりに早期の性交渉に対しては、積極的にとめるように試みるべきである。

◎若者・学習・家庭

- ・若者は自分たちの性習慣に関して誤った概念を持っていることがあるので、授業はこのような問題を直していくよい機会でもある。各方面の調査では初めての性交は義務教育を終えてからが望ましいという結果が出ているにもかかわらず、若者たちの考えは“みんなと同じにしたい”であり、変わり者にみられるのを非常に嫌う。これに拍車をかけるのがマスコミである。インタビューなどでは、彼らこそ典型的若者などというものだから、性交していなければ変人なのかと自分で思ってしまう。だからこそ、ありのままの現実を伝えることが大切だし、性関係を始める標準的年齢などなく、あくまでも個人の問題であることをはっきりさせる。

また教師の側も、年齢のいっている全生徒が性交を持っているとか、誰も持っていないとかいうような間違った前提をおかないことである。

- ・学校は男女の平等が家庭で、職場で、社会において促進されるように努力しなければならない。それには生徒たちに性別役割問題について進路指導し、性関係を含めての男女関係のあり方の討論が、くりかえし行なわれるように授業をもっていくべきである。
- ・すべての生徒は性や個人の問題に関して、個別相談を受けられる機会があることを伝えられなければならない。場所は学校内だけでも学校外でもその地区内にあればよい。
- ・“性と人間関係”の授業は、少なくとも毎年1回父母会で紹介されるべきである。またその際、教師と父母が授業についての意見交換の機会を持つべきである。学校の性教育の基本線として、いろいろ異なった見解を認めていることを親に伝えることは特に大切である。

性教育を紹介する場合に、家庭と学校の仕事はある点で異なり、お互いに立場をかえることができないことを強調しなければならない。

家庭は精神的な発育と根本的な人格形成をはぐくむ。一方、学校は事実にもとづいた知識を与え、いろいろな行為や経過を洞察し、それらに対するさまざまな考え方をよりはっきりさせて生徒に伝えるのである。

◎授業方法・教師

- ・今までの性教育の授業は、低学年では地域社会、中学年では自然科学、高学年では生物、社会、宗教に折り込まれていたが、性教育の部分は非常に少なかった。それで新しく始まる“性と人間関係”の授業は、“課題活動”で取り扱われる。この“課題活動”ならば十分な結果が得られるし、生徒たちの関心と呼ぶ授業方法だ。

また、全学年を通じて国語に折り込むことが望ましい。小説などの作品を読むことによって人間関係や性問題に出会うということは、人生をより深く理解するのに大変役立つ。

- 人間関係や性問題についての専門の本が、十分な授業をするために備えられるべきである。しかし、性教育の基本線にはずれのような片寄った面とか、不十分さとか、授業にそっていない面などがある場合にはそれを正さなければいけない。
 - 性教育の図解説明の教材については、科学的に描かれた解剖や生理学に関するものである場合には、生徒の理解力や、なぜ見せるのかという動機づけがはっきりしてさえいれば選択の基準は必要ない。しかし、実際の性関係を紹介しているものである場合には、授業で見せる意図や基本的な価値がはっきりされなければならない。生理学上や芸術的な点から見て、高い質のものであれば、性交描写を含む場面のあるフィルムを授業で使うことは役に立つ。しかし、これを見せる生徒の対象は、法的に結婚ができる18歳、すなわち高校生に限定すべきである。フィルムや他の視聴覚教育用具（たとえばスライド、ラジオ、テレビ番組等）は補助教材として使われるべきで、教師の授業にかわるものでは決してない。
 - “性と人間関係”調査委員会の調査によると、性教育を今まで教えてきた各科目の教師のほとんどが、性教育をするのに十分なトレーニングを受けていないと言っている。また、トレーニングを受けた教師の方が、受けなかった教師よりもはるかによく教えているという結果も明らかになった。また、低、中、高学年では生物を除く多くの先生が、性教育を指導するのを今もって当惑すると言っている。
- 9年生を対象にした調査だと90%の生徒たちが性教育を受けたが、その生徒たちの大半が性と人間関係の両方をもっと教えてもらいたかったと言っている。性生活における最近の急激な変化や価値観の変化、それに対しての無責任な情報の氾濫などから、客観的に見てもそのような必要性があると委員会は判断した。教師のトレーニングの改善は、教師たちがよりよい性教育を提供することになる。それは彼らの知識だけの問題でなく、性への態度の向上にもなるのである。
- このような状況から、委員会では性教育授業のためのトレーニングを、教員養成学校の学生を対象に、一般教育の中でふやすことを提案している。
 - 高学年の生物の教師には、たとえばウプサラ大学にある医学生対象のセクシオロジーの科目にそって、トレーニングを拡張していくことを提案している。
 - 大学での社会学に現在は性や人間関係が直接に関係していないが、社会におけるこれらの重要性から考えて、将来社会科を受け持つ教師のために性社会学、性人類学や家族社会学など新しい要素が取り入れられるべきだとの意見が委員会の中にある。
 - 将来宗教の科目を受け持つ教師のトレーニングについては、性や人間関係の課題が大学での宗教学に折り込まれており、これに対して委員会は満足している。
 - 心理学におけるトレーニングは、性心理学として非常に広範囲な要素を取り入れている大学は1校だけで、あとの大学は扱いが非常に少ない。高校での授業を向上させるため、心理学の全部の教師が性心理学を勉強すべきであると委員会は提案している。
 - 性教育に関してはスウェーデンは世界の先駆者であるが、セクシオロジーは米国、西ドイツ、チェコスロバキアなどと比べると劣る。

したがって“セクシオロジー研究所”の設立や大学の先導をおおぎ、セクシオロジーの研究と発展が待たれる。そして、教員養成学校での性教育の授業法を、それら研究所や大学の研究員の参加をみてトレーニングすべきだと委員会は提案している。

おわりに

先行研究の整理と言っても、現段階では未完成的のジグソーパズルのような状態であるが、とりあえず現時点で知りうる限りの邦文情報はカバーしたつもりである。次の段階として Svenska（スウェーデン語の原語表記）文献による情報収集に早期に着手したい。（1999年1月21日）

註

- (1) 拙稿「スウェーデン王国・デンマーク王国の性情報および性教育事情覚書（その２）－２つの性教育研究機関におけるインタビューの報告－」『三重大学教育実践研究指導センター紀要』第18号 1998年
- (2) レオン・バウチャー（中嶋博訳）『スウェーデンの教育 伝統と変革』学文社 1985年 P.85
- (3) 同上、P.238
- (4) 川上邦夫『『あなた自身の社会』の周辺解説にかえて』アーネ・リンドクウィスト、ヤン・ウェステル（川上邦夫訳）『あなた自身の社会 スウェーデンの中学教科書』新評論 1997年 P.190
- (5) 同上、P.192－193
- (6) 同上、P.194
- (7) ビヤネール多美子『スウェーデンの性教育と授業革命』昌平社 1976年 P.5－6
- (8) 同上、P.7－32